幼児期における文字の利用

―幼児の絵本作り活動における文字の意味―

松本　博雄[1]・伊藤　崇[2]
（[1]香川大学教育学部・[2]北海道大学大学院教育学研究院）

■問題・目的

日本語を母語とする子どもにとって、文字獲得は幼児期に進行する課題である。これに関する先行研究の多くは、文字獲得を従属変数として、読み書きがいかに成り立つかを説明する研究として位置づけられる。いっぽう、そのようにして文字を獲得することがいかなる意味をもち、幼児期の生活をどのように変化させるのか、それが学童期へといかに結びつくのかを具体的に示した研究は多くない。

岡本(1985)は、子どものことばを「１次的／２次的ことば」に分類する。文字とは「今、ここ」の世界を越えるコミュニケーションを可能にする、２次的ことばの代表的媒体であることを考えると、文字を獲得し一定の水準でそれを使用できることが、子どもの思考様式の変化を下支えする機能を果たすことを仮定してよいであろう。この問題意識をふまえ、本研究では幼児の日常に埋め込まれた活動である「絵本作り活動」を素材として、文字獲得期である幼児は絵本を作成するにあたって文字をどの程度用いるか、また作成した絵本について語る際に、文字はいかに機能しうるかを検討する。

■方法

【対象】　香川県内民間保育所 4/5 歳児クラス児 23 名（女児 12 名／男児 11 名　月齢範囲 54～83 ヵ月 平均月齢 71.7 ヵ月）

【材料】　白色Ａ４用紙（切り込みを入れ折りたたみ、8 面の本にしたもの）／色鉛筆／消しゴム

【手続き】　保育室内に絵本作成コーナー（机／イスに上記の材料を準備したもの）とお話コーナー（固定カメラとレコーダーを準備し、発話と絵本各ページの内容を記録）を設置し、クラス活動の一部として実施した。はじめに実験者が見本（絵のみ／絵・文字ありの 2 種類）を示しながら絵本の作り方を説明し、「できあがったら教えてね。お話コーナーで絵本を読んで聞かせて」と伝えた。作成中は基本的に幼児には話しかけず、完成後に作成した絵本について語ることを求めた。実験者は聞き手として、①幼児が自ら語った場合は相槌を打ちつつ聞く、②途中、一定の時間を経ても語りが進まなくなった場合は幼児が語った言葉をそのまま返す、③それでも全く語りが始まらない場合は簡単に子どもに問いかけ（例：「これは？」）子どもの言葉が引き出された後は①／②に沿う、という手順で応じた。

絵本作成の説明は全ての子どもを対象に行ったが、実際に絵本を作成するかどうかは任意であった。実験は 2012 年 3 月（5 歳児クラス）／8 月（4/5 歳児クラス）の 2 回に分け実施された。

■結果・考察

作成された絵本の総数は 30 部（3 部作成 1 名／2 部作成 5 名）。うち絵とともに文字様のものが描かれた本（以下「文字あり」）は 20 部、絵のみの本（以下「文字なし」）は 10 部であり、文字のみの本はなかった。文字あり／なし毎の作成者平均月齢と平均ページ数について表に示す。「文字あり」20 部のうち、本のタイトルもしくは「おしまい」等の締めくくりの語のみが書かれたのは 4 部、カタログ的に絵を解説する単語が書かれたのは 3 部、それ以外の 13 部には、文や句など、絵とともに文字が表されていた。

表. 絵本の平均作成月齢とページ数

	平均月齢	平均ページ数
文字あり	77.25	6.75
文字なし	60.6	5.5

絵本についての語りとの関連では、「文字なし」の 10 部の場合、いずれも聞き手による積極的な援助（上記手続き③）が必須であった。いっぽう「文字あり」であれば自らつくった絵本をスムーズに語れるとは限らず、何らかの文字（例「ゆきがふりました」縦横書混在）を自ら書いたものの、後に語る際にそれを「解読」できずに（例「フリマシタ…キタ…ガ…」）自力での語りが成立しないケースも観察された（3 例）。ここから、子どもの表現中に現れた文字は、子ども自身のアイデアや思いを形として残すことに寄与する一方で、それがただちに伝達や記憶の媒体として成立するわけでは必ずしもないことが明らかとなった。さらに、語り活動に文字が埋め込まれるためには、他者とのやりとりを経る必要があることが示唆された。

※本研究は日本学術振興会科学研究費補助金・若手研究（B）（課題番号：24730657）の助成を受けた。